HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	4. 「ピア・コメント」と「ふり返り」を主軸とした学習者主体の授業活動
Author(s)	鄭, 恵先
Citation	北海道大学国際教育研究センター紀要, 20, 39-51
Issue Date	2016-12
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/65692
Type	departmental bulletin paper
File Information	toku _JISCHU20_4.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

4．「ピア・コメント」と「ふり返り」を主軸とした学習者主体の授業活動

鄭　　惠　先

1．授業の目的

本稿は、2015年度に北海道大学国際教育研究センターにおいて、カリキュラム改編により新たに開講された日本語科目「中級やりとり（基礎）３」の授業実践を報告するものである。「北海道大学日本語スタンダーズ 2016年度版」から抜粋した、「やりとり」モードの中級３レベルにおける「言語行動目標」（大項目）と「スキル」（中項目）、「アウトカム」（小項目）は以下のとおりである。スキルとアウトカムにおいては、⑴が内容の幅と深さ、⑵が働きかけ、⑶が反応に関連する記述となっている。

【言語行動目標】

自分が言いたいことを様々な表現を効果的に使って流暢かつ自然に表現することができ、相手に対して柔軟に効果的に対応することができる。

【スキル】

⑴　複雑で高度な話題について、互いの情報や意見を有効に活用してやりとりすることができる。

⑵　話しにくい事柄についても、相手の気分を害することなく、適切な表現を使って述べることができる。

⑶　微妙なニュアンスに隠された言外の意味を理解し、正しく反応することができる。

【アウトカム】

⑴　経済、政治、法律、科学など、様々な話題について、互いの情報を交換したり、意見を調整したりしながら、話をうまくまとめることができる。

⑵　垣根表現（ぼかし）や言いさし表現、敬語などを的確かつ効果的に利用し、違和感なく話を続けることができる。

⑶　相手の遠回し表現などから社会的習慣を読み取り、ふさわしい度合いでことばを返すことができる。

新カリキュラムのやりとり科目では、双方向的なコミュニケーションをより円滑に行うためのストラテジーの習得という授業目的を達成するため

に、アウトカム重視型学習（Outcome-based Learning）をもっとも重要な要素として、4技能を複合的に取り入れたより実際的な授業作りに努めた（鄭・須藤・今泉・水谷2016）。これは、双方向的なコミュニケーションに必要なやりとり能力を身につける方法として、学生みずからの気づきと意識化を促進する授業活動が必要だという意識にもとづいている。

よって、本稿で報告する「中級やりとり（基礎）3」の授業では、グループによるタスク遂行と学生間のピア・コメントを主軸とした学習者主体の協働学習に、個別のふり返り活動とそれに対する教員からのフィードバックを組み合わせて授業の設計を行った。その活動の中で、各テーマに示された相手と場面にふさわしい「働きかけ」と「反応」について、学生同士で一緒に話し合いながら考え、また個別に分析しながら文章にまとめることで、学習者がみずからの気づきを促し、意識化を深めていくことができる。

2. 授業の概要

2.1 授業の流れ

初回のオリエンテーションで学生に配付する資料の中には、以下のような記述がある。

・この授業では、「わかる」ではなく「できる」、「正しく」ではなく「ふさわしく」をめざします。

・この授業では、「話し合う」「みずから気づく」ことを大切にします。

そのために、本授業は全体的に「考える・話し合う・分析する・ふり返る」といった学習者主体の活動によって構成されている。よって、学期初めには、①グループ活動を多く取り入れる、②互いの成果物が授業の材料となる、③グループ活動に積極的に参加しないと学習効果は得られない、という3点についてくり返し学生に注意を与えている。

また、授業では学習内容として「書く」と「話す」の両方のテーマがとりあげられており、詳細は以下のとおりである。

【書く】先生に推薦状を頼む／欠席の連絡／問い合わせメール／研究生受入のお願いメール／メッセージアプリを使う／合宿での食事の希望を聞くメール

【話す】苦情を言う／謝る・代案を示す／雑談をする／会議で反対の意見を述べる／アルバイトの面接を受ける／先輩の誘いを断る／初めての

相手と電話で話す

【その他】暮らしのマナーとちょっとした一言／ちょっとしたニュアンスの違い

上記のテーマの中には、話の順序、丁寧さ、フィラー、クッション言葉、遠回し表現、終助詞などの、本科目のアウトカム達成に必要な学習項目が組み込まれており、その都度補足資料を配るなどして各学習項目についての確認と練習を継続的に行うことで、学生の気づきと意識化促進に努めている。

具体的な授業の進め方はつぎのとおりである。

ⅰ．＜導入＞の事例をもとに、＜タスク（個人）＞を考える（個別）
ⅱ．事前課題の＜タスク（個人）＞について話し合う（全体）
ⅲ．＜タスク（グループ）＞を遂行する（グループ）
ⅳ．他グループのタスクに＜コメント＞をする（個別）
ⅴ．他グループから寄せられた＜コメント＞を分析する（グループ）
ⅵ．分析結果を共有・検討し、＜ポイント・語彙表現＞を再確認する（全体）
ⅶ．＜ふり返り＞シートを提出し、教員からフィードバックを受ける（個別・全体）

上記の活動を１テーマ２コマで、大まかにⅰ.は予習、ⅱ.～ⅲ.は前半１コマ、ⅳ.～ⅵ.は後半１コマ、ⅶ.は復習という流れで行い、１学期の間に全15のテーマをこなしていく[1)]。時間軸による詳しい進行表を表１に示す。

配付資料は、＜導入＞と＜ポイント・語彙表現＞に関連する部分以外は、基本的に紙面に大まかな区分と簡単な指示文が示されただけで、その下部の空白に、その都度学生が考えたことや話し合いを通して気がついたことなどを書き込んで埋めていくように設計されている。こうしてまとめられた資料はそのまま学生１人ひとりのオリジナル・テキストとなり、「ラーニング・ポートフォリオ」として活用できる貴重な成果物となる[2)]。これは、学習者主体の参加型学習を通して学生みずからの「気づき」と「意識化」の促進をめざす本授業において、重要な手続きの１つでもある。

表１　「中級やりとり（基礎）３」の授業進行表

	配付資料など	活　動　内　容	時間
前半（１コマ目）	出欠チェックほか		10分
	（フィードバック） 返却済みふり返りシートの写し／追加参考資料	（フィードバック） ふり返りシートからの抽出事項を全体向けに補足説明 →必要に応じて、文法の追加説明	20分
	事前配布した導入シート／事前配布したタスク（個人）シート	教員が事前に提示した導入例をもとに問題提起 →全体でブレーンストーミング	25分
	タスク(グループ)シート／ＩＣレコーダー ※「話す」テーマのみ各グループ１台	（くじ引きで３～５名にグループ分け） グループ別にタスク遂行（ホワイトボードまたはＩＣレコーダー使用） →写真撮影または録音ファイルのコピー	30分
	ふり返りシート	個別にふり返りシートの前半部【中間】を記入	５分
後半（２コマ目）	出欠チェックほか		10分
	提出済みのタスク（グループ）シート／録音した音声ファイル／付箋 ※一人当グループ数－１枚を配付	各グループの内容を全体で確認 →付箋に個別にコメントを記入 →付箋の貼り出し・グループ別回収	15分
	回収した付箋	グループ別にコメント内容を確認・検討	10分
	教員のコメント付きのタスク（グループ）シート	コメント内容についてグループ代表が意見を整理し発表 →発表内容と教員添削内容をもとに全体で話し合い	30分
	ポイント・語彙表現シート	全体でおさらい・最終確認	20分
	ふり返りシート	個別にふり返りシートの後半部【最終】を記入 →提出	５分

2.2　授業の具体例

ここでは、授業内容の一例として「欠席の連絡」という「書く」テーマの詳細を示す[3)]。

＜導入＞[4)]

日付：2014年10月17日11：48
宛先：田中奈美〈tanaka1234@oia.hokudai.ac.jp〉
件名：申し訳ないですが、授業をキャンセルしていただけませんか

田中先生、

日本語クラスのチャンです。お忙しいところをお邪魔して、どうもすみません。
月曜日から体の調子が悪かったため、今週には連続的に欠席してしまって、とても申し訳ございません。今日は本当に授業に参加したいんですけど、朝起きる時には以前のようにまためまいをしました。そして、吐き気がありますので、大変でした。
ですから、今日は先生の授業に出席しませんが、とても失礼しました。午後、病院へ行く予定ですが、早く元気に戻りたいと思います。
今週連続的に欠席にして、本当に申し訳ないですが、お許しください。

チャン

＜タスク（個人）＞

⑴ このメールを読んで、田中先生はどう思ったでしょうか。
⑵ メールの何が問題だと思いますか。以下の２つの面から考えてください。
　ａ．日本語のまちがい
　ｂ．不適切な内容
⑶ あなたが田中先生だったら、このメールを読んだ後どうしますか。

前半の授業では、まず、＜導入＞の例を分析対象に、各自が事前課題として考えてきた＜タスク（個人）＞の内容をクラス全体で共有しつつ、「欠席の連絡」という活動を遂行する際に重視すべき要素と注意点、よく使われる表現などについて、教員と学生との話し合いを通して整理する。これがクラス全体でのブレーンストーミングである。その後、くじ引きで３～５名のグループを作り、グループ別に以下の＜タスク（グループ）＞を遂行する。

＜タスク（グループ）＞

・皆さんがチャンさんだと思って、メールを書き直してください。

写真１はグループでタスクを遂行する様子である。この写真でわかるように、本授業は主にグループ活動がしやすいアクティブラーニング教室で実施されており、ＯＨＰやプロジェクターはもちろん小型ホワイトボードやＩＣレコーダーなどを積極的に用いて、学生同士の協働がもっとも効果的に行われるように最大限の配慮がなされている。ここまでが、前半の授業の内容である。



写真１　グループ別のタスク遂行の様子

後半の授業では、学生同士のピア・コメントが主な教室活動になる。まず、第１段階として、前半１コマ目の授業で各グループが記述または録音したタスクの結果を教員がまとめてクラス全体に提示し、各学生はそれらに対して個別に付箋を用いてコメントをする。コメントの際に、学生には常に書面で以下のような指示を与えて活動の趣旨を想起させている。

＜コメント＞

・ほかのグループが書き直したメールの良いところは何ですか。
・ほかのグループが書き直したメールの悪いところは何ですか。
・どのように直せばもっとよくなると思いますか。

第２段階では、ふたたびグループ別に分かれて自グループに寄せられたコメント内容を検討、分析する時間を設ける。写真２がその様子である。第３段階では、各グループのタスク結果にあらかじめ教員が赤ペンで添削しておいたものを提示し確認しつつ、各グループに寄せられたコメント内容とそれに対するグループメンバーの意見をクラス全体で共有する。最後に、教員が事前に用意した＜ポイント・語彙表現＞という配付資料を配って各テーマにおいてもっとも重視すべき点と実際によく使われることばを整理し、「ラーニング・ポートフォリオ」の一部としても保存できるように配慮している。ちなみに、この段階



写真２　ピア・コメント活動の様子

では、各テーマに関連する学習項目や、学生が苦手とする既習文法や文型についての補足資料などを適宜配付し、学習内容の定着に努めた。

前半と後半の各授業の終了時には、その日の教室活動をふり返るための＜ふり返り＞シートの作成を義務化しており、その項目は以下のとおりである。

＜ふり返り＞

【中間】
(1) 話し合いのあと、新しくわかったこと、または何か気がついたことはありましたか。
(2) メンバーと自分の意見が違うところはどんなところでしたか。
(3) メールを書き直すとき、いちばん気をつけたところはなんですか。

【最終】
(4) 「欠席の連絡」のメールを書くとき、どんな内容をどんな順序で書きますか。
(5) 「欠席の連絡」のメールを書くとき、よく使う表現はどんなものですか。
(6) 「欠席の連絡」のメールを書くとき、不適切（不自然）な表現はどんなものですか。ほかに、何に気をつけますか。

【中間】の項目は前半の＜タスク（グループ）＞が終わった後、【最終】の項目は後半の授業終了後に作成する。学生から提出されたふり返りシートは教員がコメントして返却するが、その内容の中から指摘すべき箇所をまとめて次の授業でクラス全体に向けてあらためて訂正・追加を行う。

2.3 評価の方法

本授業における成績評価の方法は、ふり返りシートの提出頻度とその内容の質に対する評価50%、中間試験と期末試験をあわせて50%（各々25点満点）としている。提出された13回分のふり返りシートは、3・2・1の3段階の点数で評価される[5)]。また、試験の内容には、「書く」（筆記試験、10点）と「話す」（教員とのロールプレイ、15点）の両方が盛り込まれており、試験問題は配付資料の中に【発展】という項目を設けて事前に提示している。たとえば、本稿で例示した「欠席の連絡」の配付資料の中で事前に提示した試験問題は、以下の内容である。

【発展】

明日、修士論文の指導教員である鈴木先生に、ほかの大学院生３人と一緒に論文指導を受けることになっています。２週間前に、みんなで都合を調整して日にちを決めました。ですが、今日、急に体調を崩してしまい、明日の論文指導に参加できそうにありません。明日は、学生がみんな自分の研究内容について発表して互いに意見交換する予定になっています。先生に欠席の連絡のメールを書いてください。

試験では、授業で強調した各テーマのポイントや語彙表現がふさわしく使われているかを評価の対象としている。ちなみに、上記の試験で注目する評価項目については、＜ポイント・語彙表現＞の資料にすでに具体的な例文とともに示されており、表２は「欠席の連絡」の配付資料の一部である。

表２　「欠席の連絡」の配付資料＜ポイント・語彙表現＞

【ポイント】
・日常的なメールの書き方は、できるだけ「結論を先に」「簡潔に」
・メールの目的を明確にする。「欠席連絡」メールの目的は～
・件名には相手に必要な情報（日付・科目名・氏名など）を簡潔に。
（中略）
【語彙表現】
・体の具合が悪い／体の調子が良くない／体調を崩す　※？病気になりましたので
・「出席」対「参加」、「原因」対「理由」
・実は、先週から体調を崩してまして～
・ゆっくり休めば、なんとか回復できると思いますので～
・様子を見て、あらためてご相談します。
（後略）

3.　授業の成果と学生の反応

3.1　コメントに見られる学生の意識の変化

ここでは、本授業の主軸となる「ピア・コメント」と「ふり返り」活動の成果について、学生の＜コメント＞を分析した結果と、学生アンケートに見られる学生の反応をもとに考察する。活動の終了後に回収した付箋を時間軸に分析した結果、学習が進むにつれて学生のコメントにはつぎのような変化が見られた。

⑴　微妙なニュアンスの違いを引き起こす要素について、学習者の意識の向上がうかがえた。
⑵　相手の意図や気持ちを推測してうまく反応する聞き手としての役割について、学習者の意識の向上がうかがえた。
⑶　授業で反復・強調される学習項目についてのコメントが増えていくことから、意識化の促進がうかがえた。
⑷　コメントの量が増え、指摘の内容がより具体的になっていくことから、分析力の向上がうかがえた。

たとえば、学期後半の学生のコメントからこれらの変化に関連する言及をあげると、以下のようなものがある[6)]。

⑴’ intonation のせいでちょっとえらそうな感じ／最後ののばした「はーい」はよくない／…という表現がちょっと強く聞こえる／スピードはいいと思います／イントネーション的にあまり心配していないみたい／あまり強くない言い方でいいと思う。しかし何回も使ったので少しうるさく聞こえるかも
⑵’ 「たしかに、部長が言った通り…」がいい／「そうですね↗」より↘／「そうですかね」→「そうですね」／となりの人がよかった／「ちょっとね」はいい反応／たしかに…（→確認）しかし…（→反対の意見）
⑶’ もうちょっとクッション言葉があったほうがいい／箇条書きがわかりやすい／「いたします」は丁寧度３と合わない／「あっ、あのう」こちらの「あっ」というフィラーはふさわしくない／とおまわしがうまくしたと思う／「ね」に気をつけて
⑷’ おわりかたがいい。他の人々も「はい！」と確認して、スムーズな感じがある／ながれはいいと思う。自分の意見をちゃんとまとめて、いい流れで意見を言った。／ポスターの発音　ポスタに聞こえた／ジョニーデップという俳優→ここ要らないかも。スタップのみんな、たぶん知ってるから

まず⑴’では、主に音声によるニュアンスを指摘する声が多く見られ、語彙や文章より高度なレベルと言えるプロソディへの意識が高まっていることがわかる。⑵’では、相手の話にどう反応するかに関連して、とりわけ相手に与える印象に注目したモダリティー形式についてのコメントが目立っている。また⑶’では、授業の中で教師がくり返し強調した学習項目

の「クッション言葉」「丁寧度」「フィラー」「終助詞」といった用語がコメントの中で徐々に増えていく様子がうかがえた。最後に(4)'では、活動初期のコメントに「ただしいと思います／いい／全部いいと思う／ちょっとふさわしくないと思う」などの大まかな内容が多かったのに比べると、文面がかなり具体化していることがわかる。これには、ピア・コメント活動のとき、「コメントはできるだけ具体例をあげて書くこと」、「付箋に記入する際に、発音／表現、内容／文法というふうに項目を分けて書くこと」「寄せられたコメントを検討する際に、付箋を内容別に分類しながら分析すること」といった点を常に強調することで、学生みずからの気づきと意識化を促したことが結果として表れたことと考えられる。

一方で、「良いと思う」「…の部分がちょっと変」などの、表面的な感想や漠然とした指摘だけのコメントも続いて散見されており、低い学習意欲やマンネリ化の表れなど、学生の自主的な活動ならではの限界もうかがえた。こういった問題点を改善するためには、本授業による学習効果を学生が学習過程の中でより具体的な形で実感でき、その結果、みずからのモチベーションを継続的に維持できる工夫が必要だと考える。

3.2　学生アンケートに見られる活動への評価

前述した(1)から(4)までの＜コメント＞の分析結果は、量的なデータにもとづくものでもなければ、学生1人ひとりの思考過程を個別に観察した縦断的調査によるものでもない。そのため、現段階においてこの結論は、あくまでも予備的考察による推論に過ぎない。しかし、学期末に行った学生アンケートの結果からも本授業の方法については好意的な評価が多く、学生みずからも本活動の意義と効果についてはある程度評価していることがわかる。

学生アンケートは、中・上級の日本語科目で共通様式を用いて行われた。2016年度第１学期に実施された本科目のアンケート結果から、まず５段階による６項目に対する評価は以下のとおりである。(1)～(3)は５点に近ければ近いほど、(4)～(6)はちょうど真ん中の３点に近ければ近いほど評価が高いと理解するのなら、以下の数値からは本授業活動がおおむね良い評価を得られたと判断できる。

(1)　日本語力（上がった 5－下がった 1）　　：平均4.4
(2)　教材・資料（よかった 5－悪かった 1）　　：平均4.5

⑶　活動目的（理解できた 5－できなかった 1）：平均4.5
⑷　進め方（速かった 5－遅かった 1）　　：平均3.5
⑸　授業準備（大変だった 5－簡単だった 1）　：平均3.0
⑹　宿題（多かった 5－少なかった 1）　　：平均3.0

つぎに、自由記述形式による「良かった点」の項目には、とりわけ「ピア・コメント」と「ふり返り」を主軸とした教室活動に肯定的な意見が多く見られている。活動別に抜粋した一部の記述を以下に示す。

【グループワーク、ピア・コメント活動について】

・グループワークと話す練習はとても役に立ちました／・意見交換をしてタスクを完成しながら得られることが多かった／・全グループが作った会話やメールなどを見、ふせんでコメントを書き、一緒に話し合うことがよかった／・みんなグループを分けて話し合って作業して他のグループからコメントをもらってすごく勉強になりました／・コメントをしたあとに、まずグループで話す、そしてクラスで話し合うことはとてもよかった

【ふり返り、フィードバックについて】

・ふり返りシートで自分の理解しているところと理解していないところが明白にわかること／･ふり返りシートで復習できて､自分が知らなかったことについてわかってすごくよかった／・私たちが使った文章や録音からフィードバックをしてくれて個人感があって良かった／・おさらいで先生がまとめてくださったこと

前述したとおり、本授業では、双方向的なコミュニケーションに必要なやりとり能力を身につける方法として、学生みずからの気づきと意識化を促すために、学生間の「ピア・コメント」と「ふり返り」を取り入れた学習者主体の協働学習を教室活動の主軸としている。以上で述べたように、学生アンケート結果の中でもとりわけ「活動目的への理解度」に対する平均4.5という評価と、上記の自由記述欄の内容を総合して判断すると、本授業の新しい試みを学生は的確に理解した上でおおむね満足していることがうかがえる。

4.　今後の課題

以上、「北海道大学日本語スタンダーズ 2016年度版」にもとづいて行われた「中級やりとり（基礎） 3」の授業実践について報告した。北大版日

本語スタンダードでは、「留学生が日本人と対等な立場で協働できるための総合的コミュニケーション能力の獲得」を日本語教育の目標としている（小河原2015）。前述したとおり、中でもやりとり科目では「双方向的なコミュニケーションを円滑に行うためのストラテジー習得」を学習の目的としている。とりわけ、「中級やりとり（基礎）３」では、学生の成果物を材料とした協働を通して、双方向コミュニケーションにおける「働きかけ」と「反応」に注目して、個別・グループ・クラス全体のさまざまなレベルで考えて話し合い、分析してふり返るという実践を行った。学生のコメントを時間軸に分析し、学生アンケートによる学生の反応を確認した結果、「ピア・コメント」と「ふり返り」を主軸とした本教室活動が、学習者みずからの気づきと意識化の促進に貢献しており、学生もその効果について認識、満足していることがわかった。

一方、学生アンケートを通して今後の課題も浮き彫りになっている。自由記述欄には、「改善すべき点」と「取り入れてほしい内容」という項目があり、そこには「会話の練習時間が少し足りない」「時々テーマはあまり興味ない」といった学生の声が述べられている。今後も引き続き、各活動の流れと時間に対する量的な面での適切な配分と、学生が各テーマの内容をより身近に感じられる質的な面での工夫が必要不可欠だといえる。

また、冒頭で示した「北海道大学日本語スタンダーズ 2016年度版」に示されている「中級やりとり（基礎）３」の言語行動目標・スキル・アウトカムが、最終的に、これまで述べた本授業の教室活動によってどこまで目標達成できたかについて、現段階では断言できる根拠が足りないのも事実である。今後は、授業実践に対する分析の方法をより綿密に検討・実施することで、目標達成に関する裏づけをさらに固めていくとともに、授業内容の改善のための材料として活用していきたいと考える。

注：

1）記述したテーマの中で「その他」に該当する２つはそれぞれ１コマのみで行われた。

2）「ラーニング・ポートフォリオ」とは、学生がみずからの学習実践や学習成果の記録をまとめたもので、収集資料やプログレスレポート、ふり返りメモやチェックシートなどがある。学生の思考過程を検証し、診断能力を高める重要な学習ツールとして活用される。

3）実際の配付資料には、中級以上の漢字には振り仮名を振ってあるが、本稿では紙面の都合上省略する。
4）＜導入＞に提示される例は、生資料を改変したものやネットから借用したものなどで、出典についてはすべて資料の中に明記している。
5）前述した15テーマの中で、「その他」の２つに対してはふり返りシートの提出がなかった。
6）原則、学生のコメントは加工せずにそのまま転記している。

参考文献：

小河原義朗（2015）「多文化交流科目を中心とした日本語教育のカリキュラム改編」青木麻衣子・小河原義朗（編著）『国際本部留学生センターブックレット１　留学生と日本人学生がともに学ぶ「多文化交流科目」を考える』、pp.83-96
鄭惠先・須藤むつこ・今泉智子・水谷圭子（2016）「中級「やりとり」科目の実践報告―アウトカム重視型のコースデザイン―」『日本語教育方法研究会誌』Vol.22 No.3、pp.12-13

付記：

本論文は「日本語教育国際研究大会 BALI ICJLE 2016　バリヌサデュアインターナショナルコンベンションセンター（インドネシア・バリ島）」にて発表した「『ふさわしい』日本語のやりとりとは何か－学習者同士のピア・コメント活動を通した気づきと意識化の促進－」に加筆、修正したものである。

ちょん　へそん（国際教育研究センター准教授）